

辛亥前後の中日政治における人生の邂逅
——肅親王善耆と川島浪速の関係に関する史的考察——

王 宇
(翻訳：後藤裕也)

The Chance Meeting of a Lifetime in Sino-Japanese Politics
during the Xinhai Revolution: the Historical Significance of
the Relationship between Shanqi and Kawashima Naniwa

WANG Yu

In reviewing the historic relations between China and Japan, it is clear that they have had a much closer relationship with each other than they have had with other countries. Against the large political backdrop of both countries, there is no question that research on the important roles enacted by historical figures that transcended national politics is of immense academic importance. Shanqi and Kawashima became acquainted during the confusion of the late Qing period, well before the Xinhai Revolution, and deepened their acquaintance during the period of the new government through military police. After the Xinhai Revolution, the two became aware of similarities in their political ideals and social position, and subsequently planned the liberation of Manchuria that ended in failure. Seen over the passage of time from pre-Xinhai Revolution to post-Xinhai Revolution, the dramatic fate of the Shanqi and Kawashima Naniwa, both tossed in the waves of history, and their friendship through political practice, it is immediately clear in the process of investigation that there was a mutual recognition of the troubles they each embraced during the historical revolution. Does this reflect the indivisibility of national interest and the political fate of individuals, or does it represent the historical move of Japan's foreign expansion amidst the complexities of the political state of the late Qing/early Min period in the early twentieth century?

序 言

中日関係史の研究において、善耆と川島浪速は重要にして複雑な人物である。目下のところ、学界の善耆に関する研究は、彼を含めた個人に対する単独の歴史的活動にほとんど集中している。以下にそれらを列挙すると、まず一つは、清末の新政に対する唱導と推進に関するもの、たとえば警察制度の革新と創設、地方自治の唱導と実施、京師での禁煙活動の展開などである¹⁾。また二つには、善耆が宗社党に参加して復辟活動を取り仕切ったことについてであるが、学术界は多年來これを批判し続けてきた²⁾。一方で、川島浪速に関する学界の研究は、主に晩清期における警察の創設、および「滿蒙独立運動」に集中しており³⁾、辛亥革命前後における二人の交際につ

-
- 1) 薛瑞漢氏に「善耆与清末地方自治」(『四川行政学院学报』、2004年第5期)、「清末新政时期的善耆与蒙古」(『歴史教学』、2004年第8期)、「善耆与革命党人関係初探」(『中州学刊』、2006年第6期)、「善耆与清末戸口調査」(『河南廣播電視大学学报』、2007年第2期)、周福振氏に「善耆与清末新政—以20世紀初十年的北京新政改革為視点」(『北京社会科学』、2005年第1期)、「善耆与革命党」(『清史研究』、2005年第3期)、「論肅親王善耆的立憲實踐活動」(『北京社会科学』、2009年第3期)がある。このほかにも、白傑「清末政壇中的肅親王善耆」(『滿族研究』、1993年第2期)や、項小玲「善耆与肅忠親王遺集」(『滿族研究』、1997年第1期)、王颯・徐広「善耆与中国近代警政」(『湖南公安高等専科学校学报』、2002年第2期)など関連する論考があるが、いまここにその一を列挙しない。
 - 2) その主要な論文には以下のものがある。林増平「民国初年宗社党摭談」(『民国春秋』、1987年第1期)、郭衛東「日本帝國主義与宗社党」(『歴史教学』、1984年第7期)、閔威「宗社党述略」(『歴史教学』、1990年第4期)、宋欣的「宗社党研究」(西北民族大学2007年碩士學位論文)、憲均「肅親王善耆的復辟活動」(『晚清宮廷生活見聞』所収、文史資料出版社1982年版)、「善耆反对宣統退位図謀復辟」(『文史資料選編』第12輯所収、北京出版社1982年版)。しかし、これらはただ簡潔な紹介に留まるものばかりで、当時の時代背景や肅親王の政治的身分といった面から、全面的かつ具体的な分析を加えられてはいない。
 - 3) 中国第一歴史檔案館「有関川島浪速の幾件史料」(『歴史檔案』、1993年第4期)、中見立夫「川島浪速与北京警務学堂・高等巡警学堂」(『近隣』、2001年8月第39号)、弘谷多喜夫「北京警務学堂と川島浪速」(『国立教育研究所紀要・“お雇い日本人教習の研究”特輯』第115集、1988年)、肖朗・施崢「日本教習与京師警務学堂」(『近代史研究』、2004年第5期)、夏敏「川島浪速与晚清警政建設」(『政法学刊』、2007年第1期)、楊永耀「川島浪速与“滿蒙独立運動”」(『内蒙古民族師院学报』哲学社会科学

いては、学界の注意はあまり及んでいない⁴⁾。これらの論著は、あるいは皮相的な見方に留まり、あるいは一つの件についてのみ論じるに過ぎず、単純に政治化、類型化した評価を二人に下すのみで、具体的な歴史の場面に照らした客観的で明確な論述は、なお為されていない。中国史の記述では、おおむね階級やイデオロギーの面から、善耆と川島浪速の両者を「歴史の恥辱の柱」にはりつけている。しかし、客観的な学術研究のレベルより見れば、二人は清末民初の政治勢力の中で大きな影響力を持っていたと言える。本論では、主に善耆と川島浪速に関する著作や檔案、回想録などに依拠して、両者の文化を越えた交流について整理と分析を試み、内心の葛藤と時事の変遷の間で二人が相互に引き起こした作用について、考察を加えることとする。

善耆（1866-1922年）、字は艾堂、号は偶遂亭主、満州鑲白旗人、八大鉄帽子王の一人。輝かしい皇族の血統をもち⁵⁾、清太宗文皇帝ホンタイジの長子である肅親王豪格の子孫で、第十代肅親王である。辛亥革命が起こると、善耆は清朝皇帝の退位に反対して復辟活動を組織し、共和政反対派の中心的人物となった⁶⁾。このような、清室に同調して民国を敵視する政治的選択は、清朝廷の貴族としての政治的身分と不可分のものである。『肅忠親王遺稿』⁷⁾は善耆の手になる詩歌集で、書名は朱色の印刷、題字は恭親王溥偉により、日本人の小平総治が刊刻した。その内容の伝えるところは、表面上は詩歌としての文化的なものであるが、その企図するところには政治的な機能が備わっており、善耆の思想状態が体现されている。

学版、1998年第2期）、呉永明「民元日本策動満蒙“独立”陰謀述略」（『民国檔案』、2002年第2期）、王樹才「日本帝國主義分裂中国的首次嘗試—第一次満蒙独立運動」（『中国社会科学院研究生院学報』、1985年第4期）。

- 4) 愛新覺羅・連紳遺作、賈曉明整理「肅親王善耆与川島浪速的結識」（『海内与海外』、2008年第12期）参照。
- 5) [日]川島浪速『肅親王』（出版地不明、1914年）第1-9頁、[日]石川半山『肅親王』（警醒社書店、1917年）第6-11頁参照。
- 6) 胡平生『民国初期的復辟派』（台湾学生署局、1985年）第2頁参照。
- 7) 善耆『肅忠親王遺稿』（1928年、国家図書館蔵）。

川島浪速（1865-1949年）は東亜同文会評議員で、「満州建国の先駆者」である⁸⁾。1882年、東京外国語学校中国語科に入学して中国語を学ぶ。1886年、川島浪速は参謀本部に職を得て、上海などの地で軍事情報の収集に当たる。1894年、日清戦争が勃発すると、彼は陸軍通訳官として戦争に参加し、1900年、八ヶ国連合軍が中国に侵攻すると、川島浪速は再び通訳官として日本軍の北京侵攻に随行した。1901年4月、清政府は彼を北京警務学堂の総監督に任用する⁹⁾。辛亥革命の後、川島浪速は善者による清朝の復辟活動を支持し、日本軍部や関東都督府の支持を積極的に取りつけ、旅順を根拠地として「満蒙独立運動」を画策した。1949年、病を得て東京で死去する¹⁰⁾。川島浪速の主要な著作としては、『対華管見』¹¹⁾、『肅親王』¹²⁾、『満洲建国大秘史：満洲建国一周年記念』¹³⁾ などがある。

一、「公と私」：初見と交際

日本は古くから中国大陸文明の影響を受けてきたが、近代、天皇制の確立に従って軍国主義が台頭し、明治政府は「朝鮮を併呑して中国を征服し、

-
- 8) [日] 黒龍会主編「満洲建国の先駆者川島浪速」（『東亜先覚志士記伝』、原書房、1966年）第212頁参照。
 - 9) 汪向栄『日本教習』（生活・読書・新知三聯書店、1988年）第70頁参照。
 - 10) [日] 東亜同文会編『続支回顧録』（下）（原書房、1981年）第198-201頁、「勲六等川島浪速以下三名外国勲章記章受領及佩用ノ件」（日本国立公文書館、JACAR.Ref A10112590000）、「勲五等川島浪速」、「川島浪速簡歴書」（日本国立公文書館、JACAR.Ref A10112692200）などを参照。
 - 11) [日] 川島浪速『請看倭人併呑中国計劃書』（龔徳柏中訳本、出版社不明、1913年）、[日] 会田勉『川島浪速翁』（文粹閣、1936年、第173-190頁、川島浪速著『対華管見』を収める）、趙金鈺『日本浪人与辛亥革命』（四川人民出版社、1988年、第317-330頁、『対華管見』中訳本）。
 - 12) [日] 川島浪速『肅親王』（出版社不明、1914年）。章開沅・羅福恵・嚴昌洪主編『辛亥革命史資料新編』（二）（湖北人民出版社、2006年、第366-409頁）には、川島浪速著『肅親王』の翻訳を収める。
 - 13) [日] 川島浪速『満洲建国大秘史：満洲建国一周年記念』（東京、新潮社、1933年）。

東アジアないし世界に覇を唱える大陸政策¹⁴⁾を策定した。とりわけ日清戦争以来、自ら中国の革命運動に参加したいいわゆる「日本東亜先覚志士」は枚挙にいとま無く、かつその多くは「大アジア主義」をあがめ尊び、「大陸コンプレックス」を抱いていた。日本の浪人川島浪速こそはその代表的人物である。彼は何度も中国を訪れたことがあったが、肅親王善耆との偶然の邂逅は1900年のことである。これ以前には、二人の生活の軌跡はまったく交錯していないことから、「混乱の中の邂逅」と言えるであろう。それ以後、公的には新政期の警務の中で、「主人と客分、または上司と部下の関係」を演じつつ、私的には「国を越えた友人」となり、こういった交際が、後日の協力のために確固たる基礎を打ち立てていった。

光緒二十六年（1900年）七月二十一日、八ヶ国連合軍侵攻の砲声が上がると、慈禧太后と光緒皇帝は西安に逃れ、紫禁城にはわずかに六名の妃と百余名の宮女、千名足らずの宦官およびそれらの護衛二千人ばかりが残って紫禁城を守っていた。ドイツ軍総帥ヴァルデーゼーはもともと紫禁城を砲撃するつもりでいたが、川島浪速が投降勧告に進み出ることを願い出た。彼は神武門まで至ると、「籠城の不利をつとめて説き、守備軍に投降するよう説得した¹⁵⁾。川島浪速のこの行動は、紫禁城が灰燼に帰すことを防いだだけでなく、その名声をも大いにとどろかせた。

善耆は西安へ逃避する途上で北京に戻るよう命を受け、「李鴻章とともに一切の事柄を取り仕切る¹⁶⁾」こととなる。帰京後、善耆は川島浪速が投降を勧めて紫禁城を保った壮挙を聞くと、非常に興味を持って、「湖広総督瑞澂とともに、自ら東四三条胡同の日本軍宿舎に住む川島浪速を訪ねた¹⁷⁾。その翌日、川島浪速も善耆を返礼に訪ね、肅親王府が戦乱で破壊されている

14) 沈予『日本大陸政策史（1868-1945）』（社会科学文献出版社、2005年）第34頁より。

15) [日] 東亜同文会編『続支回顧録』（下）（原書房、1981年）第201頁より。

16) 杜如松『記肅親王善耆』（『晚清宮廷生活見聞』所収、中国文史出版社、1982年）第303頁より。

17) [日] 石川半山『肅親王』（警醒社書店、1917年）第45頁、[日] 川島浪速『肅親王』（出版社不明、1914年）第17-18頁より。

のを目にし、「このたびの事変で最も大きな被害を受けたのは殿下でしょう。深く同情の意を献げます」と言った。これに対して、善者は次のように答えている。「国家がこのたび打撃を受けたのは、まったくの自業自得でしょう。この打撃はきっと我らの覚醒を促すよい警鐘となるはずです。その意味では、我々は祝うべきかもしれません。このたびの戦乱を経て、日本と親交を結ぶ機会を得たことに較べれば、わが家の被害など言うに足りぬことです」¹⁸⁾。善者と川島浪速の交際が、ここに始まったのである。

光緒二十七年（1901年）四月、日本占領区内の治安維持のために、日本式の警察官を養成することになったが、このとき川島浪速の提出した「日本軍は北新橋の神機營兵舎跡地に警察官教育機構を開設すべし」という意見が、日本軍当局によって批准された¹⁹⁾。六月、「北京議定書」の規定に従い、八ヶ国連合軍は清朝政府に占領区域の民政治理権を返還し、北京を撤退した。七月、清朝政府は旗人の圧迫された生計を緩和するため、旗人の採用に重点を置いて警務学堂を創設し、川島浪速を監督として招聘した。双方が交わした契約は以下のごとくである。「大清政府は大日本川島を監督として招聘し、学堂の一切の事柄を取り仕切らせる。後には学生を日本に引率して学習させること。毎月の報酬は四百円で三年を期限とし、満期後の継続については、その時に再度協議する。学堂内にて招聘する日本人教師若干名については、その一切の経費を負担し、すべて川島に経理を一任する。卒業した警察官は、川島によって等級を定められ、採用されると勤務に派遣される。その後、随時川島による勤怠の調査を受け、もって昇降を決する」²⁰⁾。川島浪速が「警察官を募集すると、多くの者がこれに応じた」ため、「城内の警官はみな旗人が務めることになり、その生計は幸い少く

18) [日] 石川半山『肅親王』（警醒社書店、1917年）第45-46頁、[日] 川島浪速『肅親王』（出版社不明、1914年）第18頁より。

19) [日] 中見立夫「川島浪速と北京警務学堂・高等巡警学堂」（『近隣』、2001年8月第39号）参照。

20) 中国第一歴史檔案館「有関川島浪速的幾件史料」（『歴史檔案』、1993年第3期）、[日] 黒龍会主編『東亜先覚志士記伝』（原書房、1966年）第275頁より。

持ち直した」²¹⁾。

光緒二十八年（1902年）、善耆は歩軍統領兼工巡局大臣に任命され、京城の警察および設備工事を主管することになる。警務学堂もその管轄範囲内にあり、川島浪速もその指揮下に入った。そのような日々の中で、二人はますます親密になり、「川島は善耆に感じ入り、人を日本に派遣して警察業務や土木工事を視察するよう提案すると、肅邸の委兄（毓朗を指す）がこの任に当たることとなった。已（「兄」に改めるべきであろう）はそこで川島とともに、五月十一日に北京を出発した。川島のほかには、学生の陸生宗興と典医の席珍のみを連れて東へ渡る」²²⁾ ことになる。

明治維新以後、日本は急速に強国への道を歩んでいく。善耆は時局の動乱を深く愁い、日本の明治維新に対して「強烈な関心を抱いていた」²³⁾。彼は大久保利通や木戸孝允、西郷隆盛といった維新の三傑を非常に敬慕してだけでなく、しかも「犬養毅に対してもかなり尊敬し信頼していた」²⁴⁾。日ごろから、善耆は多くの日本人とも交流を深め、大清王朝も日本と同じように強国への道を歩むことを希望していた。記されるころでは、光緒二十七年（1901年）十二月十日の晩、那桐は「袁制台、肅王爺、内田、青木、立花、鄭永邦、川島、陶杏南を招いて酒を飲み交わし、子の刻に至ってようやく解散した」²⁵⁾ という。また別に、光緒二十九年（1903年）二月二十一日、那桐は「晩に肅邸での集まりへ赴くと、同席していたのは日本人が多くを占めた」²⁶⁾ ともある。善耆は川島浪速とも何度も「天下の大勢」について意見を交わし、「日本の豊かさは中国に如かず、中国の智慧は日本に如かず、もし我ら両国が共謀協力し、緊急でないことは後に回して、軍備

21) 愛新覚羅・毓盈『述徳筆記』巻四（民族出版社、2009年）第3頁より。

22) 愛新覚羅・毓盈『述徳筆記』巻二（民族出版社、2009年）第5頁より。

23) [日] 上坂冬子『男装女諜：川島芳子伝』（項長金訳、解放軍出版社、1985年）第33頁より。

24) 章開沅『辛亥革命与近代社会』（華中師範大学出版社、2011年）第250頁より。

25) 北京市檔案館編『那桐日記』上冊（新華出版社、2006年）第411頁より。

26) 北京市檔案館編『那桐日記』上冊（新華出版社、2006年）第456頁より。

を整え実業を育てれば、まず有望であろう」²⁷⁾と述べている。

光緒三十二年（1906年）八月、京師警務学堂は京師高等巡警学堂に改められた²⁸⁾。高等巡警学堂が成立したとき、善耆はとくに関心を注ぎ、学堂の設立や章程の改定、経費発給などの面においてまで極力支援した²⁹⁾。川島浪速も日本の警察制度を善耆に紹介し、十数名の日本人教官（張作霖の顧問町野武馬、奉天満鉄公所所長鎌田彌之助など）を推薦している³⁰⁾。

このほかに、川島浪速は清朝の政局を注意深く見守っていた。宣統元年（1909年）、載灃は「足疾」を理由に袁世凱を「療養のために帰郷」させ、その一切の職務を解いた。清朝の統治集団は、朝野に権力を持つ漢民族の代表袁世凱を成功裡に排除し、再び権力を中央に奪い返したのである。しかし善耆は、袁世凱が罷免されたからといって、彼に対する警戒を緩めたわけではなかった。彼は川島浪速に命じて袁世凱の活動を秘密裡に探らせ、ありのままを報告させていたのである³¹⁾。川島浪速は袁世凱の行動を偵察するため、「ひそかに二組の密偵を派遣し、彰徳府の袁の邸に配置させた。双方には互いに事情を知らせず、中国人が信ずるに足りない情報を提供してきたときは、それでもってその真偽を見分け、偽の情報を防ぐのに役立った」という³²⁾。

同時に、川島浪速はかつて警務学堂監督の身分でもって、中国の警務建設に比較的完成された方案を提出し、京師の警務をより完全なものとするよう提案した。宣統二年（1910年）八月、善耆が日本の公使伊集院を連れ

27) 爽良「送日人川島風外帰国序」（林慶彰主編『民国文集叢刊』第一編（6）所収『野棠軒文集』、文聴閣図書有限公司、2008年、第67頁）より。

28) [日] 服部宇之吉主編『清末北京志資料』（張宗平・呂永和訳、北京燕山出版社、1994年）第200頁参照。

29) 「民政部奏辦高等巡警学堂折」（『東方雜誌』、第三卷13期）参照。

30) 憲均「肅親王善耆的復辟活動」（中国人民政治協商會全國委員會文史資料研究委員會編『晚清宮廷生活見聞』所収、文史資料出版社、1982年）第308頁参照。

31) 載灃「載灃与袁世凱的矛盾」（『晚清宮廷生活見聞』所収、中国文史出版社、1982年）第81頁参照。

32) [日] 川島浪速『肅親王』（出版地不明、1914年）第33頁より。

て高等巡警学堂を参観し、学生の授業や訓練を検閲したとき、日本の公使は学堂の整頓された様子や学科の進歩に対して賞賛を惜しまなかったという³³⁾。しかし、中には川島浪速の野心を指摘する者もいた。『京話日報』の記事によると、川島浪速には二つの大きな罪状があるという投書があった。「その一、北京警務学堂が招聘した川島浪速は、教習に携わるも多年来その効果を認められず、学生を奴隷のような人間に育てている。その二、『順天時報』のほかは、学生に新聞を読むことを許さない³⁴⁾ というものである。また別に、名士の瑞某という人物は、ある日肅邸を訪れて、「川島には下心があるとつとめて誣告した」が、善耆は大笑して、「君はわが身一つで禍を脱し、川島のせいにするというのか³⁵⁾ と答えたという。協力と交際が続くに従って、善耆と川島浪速の二人は日ましに互いを理解し合い、今後の協力に向けての基礎を固めていったのであるが、しかし、いかんせん、双方が知り合ってから接触した時間はあまりに短すぎた。このときの善耆は、川島浪速の本当の目的をいまだ知らずにいたのである。

善耆と川島浪速がかつて「義兄弟の契り」を結んだのかどうかについては、なお考証を要する³⁶⁾。しかし、誰もがよく知るように、清朝の客卿二品の官服に身を包んだ川島浪速が、善耆と屏風の前に並んで座る写真より推せば、二人の関係は比較的親密なものではあったであろう。そして、現実の政治に対する考慮と商量により、善耆は自分の娘である愛新覚羅・顛珂（後に川島芳子と改名）を川島浪速のもとへ養女に出しているのである。これより、二人の関係はそれ以前に比べてより親密になっていることが見て

33) 「伊集院公使参観巡警学堂」（『順天時報』、1910年9月24日）参照。

34) 局外の匿名者による申し出「来函」（『京話日報』607号、1906年5月5日）より。

35) 愛新覚羅・毓盈『述徳筆記』巻四（民族出版社、2009年）第2頁より。

36) 〔日〕黒龍会主編『東亜先覚志士記伝』（原書房、1966年、第248頁）は、「肅親王善耆と川島浪速は義兄弟の契りを結んだ」という説を支持する。一方、愛新覚羅・連紳『清和碩肅忠親王善耆』（未刊行、第105頁）および善耆の第十四子憲立は、「清の制度では、親王は随意に室外の者と義兄弟になることを禁止しているため、これは川島浪速が自分を高く持ち上げるために行った自己宣伝である」として、この説を否定している。

取れる³⁷⁾。善耆からすれば、辛亥革命以前においては、明治維新を経た日本の力を借りることで、清朝の統治を強化しようと考えていた。また、辛亥革命以後は、川島浪速の「中間媒体」としての役割に頼って日本政府と連絡を取り、支持を取りつけて復辟運動を進めたいとの願望があった。一方、川島浪速は日本のために内情を偵察し、善耆の清朝「中興」を願う心理を利用して、「満蒙拳事」を画策していたのである。善耆と川島浪速の関係は、これより最も緊密に協力を進める時期へと入っていく。

二、挫折した政治的協力：「満蒙独立」の共謀

辛亥革命の時期とは、すなわち各列強国家の対華外交が大いに変化した時期である。これに対する列強国家の反響は強烈なもので、庚子事件の停滞状態から、次々に積極的な行動へと転じていった。かつて日本の首相を務めた山県有朋は、以下のように述べている。「日本は、中国に有力な皇帝がいることを望まない。そこに成功した共和国が存在することはさらに望まない。日本が望むのは弱い中国であり、日本の影響下にあって弱い皇帝が統治する中国である。それでこそ理想的な中国なのである」³⁸⁾。民国初年にあたって、政局は動揺し、帝制と共和制の両者による力比べの様相を呈していた。1911年12月、日本の外相内田康哉は、「中国の敵対行為はなお継続しており、日本政府はこれを考慮し、干渉する必要があると考える」³⁹⁾と言っている。いまや「漁夫の利を占める機会が到来し、民党の内情は日本が最もこれを把握している」⁴⁰⁾と考えていたのである。東京帝国大学教授で衆議院議員でもあった富津が『新日本』誌上に発表した論文は、日本人の

37) [日] 渡辺龍策『川島芳子』（番町書房、1972年）第41頁参照。

38) 密勒「民主政治与遠東問題」より。沈臣光『日本对中国辛亥革命の態度』（『国外中国近代史研究』第二輯所収、中国社会科学出版社、1981年、第328頁）より引用。

39) 王雲生「日本对辛亥革命之操纵与干涉」（『中国近代史資料叢刊・辛亥革命』（八）、第489頁）より。

40) 王雲生編著『六十年来中国与日本』第六卷（三聯書店、2005年）第1頁より。

心理をよく表したものであろう。「今こそ満洲問題を解決する最高の機会である。この問題は遅かれ早かれ日本によって解決されねばならない。日本はすでに満洲を合併する機会を何度か逸した。この問題の解決は、遅延すればするほど困難になろう。目の前の好機をつかみ取り、この何の困難もない一手に賭けてこそ、善策である」⁴¹⁾。

清朝が滅亡した際、宗社党のメンバーは次々と北京を離れ、ある者は租界に避難場所を求め、またある者は列強国家に助けを求めて、民国に反対し、清王朝回復に走った。ある情報によれば、肅王や恭王、載沢らは、東北地方に行って「ひそかに独立を謀り、共和の発表が出されたら、恭王を皇帝の位に即け、趙爾巽を総理とする」⁴²⁾よう考えたという。善耆とはというと、皇帝の退位にかたくなに反対し、共和にも反対して、退位の詔書に署名することを拒絶した。中華民国の官となることを望まず、中華民国の民となることはさらに望まず、「民国の寸土たりとも履まない」⁴³⁾とまで誓ったのである。復辟のためには、日本の力を借りてその支持を取りつけることも惜しまなかった。一方、川島浪速はその機を逃さず、参謀本部に電報を打ち、共和制に反対の趙爾巽と地方部隊の首領である張作霖を引き込んで、善耆を擁立して東北三省に清室の血統を継承する「独立国」の建設を企図した⁴⁴⁾。

1912年2月2日、日本は高山公通大佐、多賀宗之少佐、松井清助大尉および日本の駐北京公使館守備隊隊長である菊池武夫などを派遣し、川島浪速と協力して肅親王善耆が秘密裡に北京を離れることを手助けした。日本外務省はこの報告を受けると、陸海軍との協議を経て、旅順に駐在する官僚に、肅親王には十分な保護と利便を提供しつつも、できるだけ他人の注

41) 王雲生編著『六十年来中国与日本』第六卷（三聯書店、2005年）第14-15頁より。

42) 「致内閣電」（『光華日報』、1912年2月9日、第2版。また『盛京時報』、1912年2月4日）より。

43) 憲鈞「善耆反対宣統退位図謀復辟」（中国人民政治協商会議北京市委員会文史資料委員会編『文史資料選編』第十二輯、北京出版社、1982年、第62頁）より。

44) 胡平生『復辟運動史料』（正中書局、1992年）第50頁参照。

意を引かないようにとの指示を出した。川島浪速の協力のもと、善耆は「秘密裡到北京を離れ、他日の清室復興を期した」⁴⁵⁾のである。奉天のあたりまで来ると鉄道が破壊されていたので、山海関で下車して日本の軍艦に乗り換え⁴⁶⁾、大連の旅順に至って日本の保護隊に収容され保護された⁴⁷⁾。北京を離れる際、善耆は詩を一首——「辛亥十二月、京を出ずるに口占す」を詠んだ。詩に曰く、「幽燕は故国に非ず、長嘯して遼東に返らんとす。馬を回らせ烽火を看れば、中原に照紅落つ」⁴⁸⁾。ここには、彼の清朝復興への強烈な願望が流露している。6日、善耆一行は旅順に着くと、「関東都督府」の盛大なもてなしを受けた⁴⁹⁾。善耆の避難した旅順は、実質上、復辟活動の根拠地となったのである⁵⁰⁾。一部の王侯貴族や旗兵のもとの部下も、善耆の頼りとする主要な戦力であり、「遼陽では自称宗社党人が到るところで蠱惑していることを突き止めたので、五十人を集めた者には尉官を授け、百人を集めた者には佐官を授け、かつ旅順に行って肅邸にて引見させた」⁵¹⁾という。それからほどなくして、川島浪速が表に立つようになる。彼は「ある計画を秘密裡に進めるため、福島参謀次長と電報での連絡を取り続けた」⁵²⁾。25日、川島浪速が参謀本部に送った電報は、次のごとくである。「肅親王には満洲を割拠する気持ちが必要やあります。いまや乗りかかった船ですか

45) 陳錫璋『細説北洋』（伝記文学出版社、1982年）第314頁より。

46) 中央檔案館蔵「愛新覺羅・憲均（金復之）筆供」（檔案号：119-2-1169,1,5、1954年7月22日）参照。

47) 日本防衛省防衛研究所「肅親王の件 2月4日次官より旅鎮長官へ」（JACAR Ref C08040979100）、および〔日〕黒龍会『東亜先覚志士伝記』（原書房、1966年）第302-303頁参照。

48) 善耆『肅忠親王遺稿』（1928年）第9頁より。

49) 〔日〕栗原健『対満蒙政策史の一面：日露戦後より大正期にいたる』（原書房、1966年）第142頁参照。

50) 章開沅・劉望齡「民国初年清朝“遺老”的復辟活動」（『江漢学報』、1964年第4期）参照。

51) 中国第一歴史檔案館『清代檔案史料叢編』第八輯（中華書局、1982年）第324頁より。

52) 「大島関東都督致内田外務大臣電」（1912年2月13日、『日本外交文書選訳』第79頁）、「落合駐奉天総領事致内田外務大臣電」（1912年2月21日、『日本外交文書選訳』第83-84頁）。

ら、政府の主目的と衝突さえしなければ、わたくしめらはなお計画を推し進めたく、全力を尽くして後やむのみです。ほかに道はありません」⁵³⁾。

善耆が「日本との間に架け橋を渡し」、復辟活動を進めることを、川島浪速が積極的に助けた本当の目的は、実は以下の四点にあった。すなわち、「一、一定程度の勢力を保持し、ロシアの東進南下を防ぐため。二、最終的には支那という眼前の問題を解決し、同時に大陸への足がかりとして、日本がアジアにおける主導権を握る基礎を打ち立てるため。三、大陸への植民という方法で、日本の人口過剰をうまく処理するため。四、大陸の未開発の資源でもって、日本本土の資源の貧困を補うため」⁵⁴⁾であったのである。また同時に、「まずは少なくとも満洲の一部と蒙古東部を得て、我が国のために領有すべき」ことを提案し、「満蒙の人々が分立を望むようにもっていき、一国を形成することができれば、すべての政務をほとんど我が国の人の知識によってあやつる組織を建設することができるであろう」⁵⁵⁾と考えていたのである。

日本の支持のもと、善耆は遼陽や海城などの地において勤王軍を組織し、「大清帝国政府」や「大清帝国勤王師総司令」などの印鑑、および「龍旗」五十枚あまりを準備した。その間、善耆は張作霖とも秘密裡に連絡を取り合うようになり、力を合わせてともに挙兵し、清朝回復を願った。2月9日、張作霖は日本駐奉天総領事落合謙太郎と秘密裡に会談し、「もし袁世凱が趙爾巽を罷免し、ほかの人物を総督にしていたら、彼自身は絶対に承伏せず、肅親王を推戴して日本国を頼っていたであろう」⁵⁶⁾と言っている。そこで落合は内田康哉に張作霖の態度を報告したが、内田康哉は張作霖を信

53) 中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』第48号（中国社会科学出版社、1982年）第119頁より。

54) 游国立「日本特務と侵華戦争」（見関捷主編『近代中日関係叢書之二・日本侵華政策と機構』、社会科学文献出版社、2006年、第296頁）より。

55) [日] 会田勉『川島浪速翁』（文粹閣、1936年）第173-190頁より。

56) 「落合駐奉天総領事致内田外務大臣電」（1912年2月5日、『日本外交文書選訳』第77頁）より。

用しなかったため、張作霖を公に利用しようとはしなかった。これに加えて、袁世凱は張作霖を買収しようとしていた。「これまで張作霖は何度も大言壮語しており、いまもまた公然と裏切ろうとしているが、しかし実際は政権の変化に対して何ら行動を起こしていない。おそらくは様々な手段で袁世凱に説得されたと信ぜられる。我が警察の精確な調査によれば、張作霖は袁世凱から金数万もの賄賂を贈られており、態度は一変して軟化した⁵⁷⁾。また別の報告書によると、袁世凱は「軍刀および貴重な物品一万余元分」を贈って張作霖を買収した。それゆえ張作霖は一転して共和制に賛同を示し、袁世凱支持にまわって、肅親王善耆を擁立する計画は頓挫したと言ったという⁵⁸⁾。

南北の和議が成立すると、日本政府は、「革命党は国家を建設しようとしており、日本はこれと親善協和の関係を保持する必要がある。とりわけ列国が立ち上げた借款団は、日本もこれに参加すべきである。したがって、現在、満蒙拳事の類の起こすのは、国家に利さない」という考えを示した。これにより、満蒙独立運動を支持する政策は改められ、川島浪速を東京へ召し返し、そういった運動を停止するよう要求した。そして、「もし指示に従わなければ、政府は公権でもって制裁を加えることもやむをえない」というのである。川島浪速としては活動の停止を聞き入れることを余儀なくされたが、しかし交換条件として、旅順における肅親王の生活を永久に保護すること、および川島浪速が一派の人々を満蒙各地に配備することには干渉しないことを要求した⁵⁹⁾。

5月下旬、多賀宗之少佐は長春の南に位置する公主嶺に武器を集め、カラチン王府で訓練していた蒙古兵を松井清助の指揮で護送させた。積み荷の総量は大型車五十台近くにもなったが、これを農具と詐り、遼河の北岸に沿って内蒙古へ輸送した。この膨大な運輸の行列は、趙爾巽の知るとこ

57) 胡平生『復辟運動史料』（正中書局、1992年）第51頁より。

58) 胡平生『復辟運動史料』（正中書局、1992年）第52-53頁参照。

59) [日] 川島浪速『肅親王』（出版地不明、1914年）第46-47頁参照。

ろとなり、彼はただちに趙家屯に駐屯して防備にあたっていた隊長の呉俊昇を出撃させた。6月8日、呉俊昇部隊の要撃が成功して、松井は重傷を負い、日本人十三名が死亡、奪った四十三台の車両にはすべて武器が載せられていた⁶⁰⁾。こうして、第一次「満蒙独立運動」は大きな損害を出したのである。

しかし、善耆の内心にくすぶる復辟の火種はいまだ消えておらず、家の者にはいつも次のように教え戒めていた。「宗社がすでに滅んだ以上、これからの前途は推し量りがたい。しかし、昔日、漢の光武帝は滹沱に麦を啜り、蕪萎亭に豆粥を飲み、ついに漢室復興という大業を完成させたという。なんじらも各々よくその分を守り、労苦を厭わぬよう望む⁶¹⁾」。7月23日、善耆はまた川島浪速とも「誓盟書」を立てた。「和碩肅親王は、大清宗室の復興、および満蒙の独立を希望する。さらには日清両国の格別なる友誼をはかつて、両国の福利を増進し、東アジアの大勢を維持して、世界平和に貢献することをその旨とする。しかし、力不足ゆえ、伏して大日本国政府の支援を願い、もって大成を期す所存である」。この文書は以下の全六項目よりなる。「第一条、南満鉄路、安奉鉄路、撫順炭鉱など一帯の日本が権限を得た場所は、長期あるいは永久にそれを認める。第二条、吉長鉄路、吉会鉄路、その他、将来「満蒙」が敷設する一切の鉄路は、すべて大日本国政府との協商を待つ。第三条、鴨緑江の森林、漁業、開墾牧畜、塩業、鉱山事業などは、すべて協商の上、両国の合弁とする。第四条、「満蒙」地方においては、日本人の居住および一切の企業を置くことを認める。第五条、外交、財政、軍事、警察、交通およびその他一切の行政は、すべて大日本国政府の指導を仰ぐ。第六条、以上に定めたるほかに、大日本国政府に相談

60) 国史館編印『近代中国外謀与内奸史料匯編：清末民初至抗戰勝利時期』（国史館、1986年）第97頁参照。また「奉天省公署檔案」については、東北地区中日関係史研究会編『中日関係史論叢』第一輯（遼寧人民出版社、1982年、第218頁）に載せる、武育文「日本浪人与宗社党的“満蒙独立運動”」を参照。

61) [日] 石川半山『肅親王』第156頁より。

すべき事からは、おしなべて指示を求め、必ずや誠意を尽くして事に当たる」⁶²⁾。

1912年8月、川島浪速は長文『対華管見』を著し、日本政府につとめて「満蒙独立」の必要性を訴えた。「日本がロシアとの均衡を保つためには、必ずや満蒙を建設して足場を固め、永遠にアジアの覇権を掌握しなければならない。その上、日本の人口は急速に増加しており、資源は限りある。一方で、満蒙の地は広く人は少ない上、資源は豊富であるから、これは日本が生存競争の困難から脱却するための植民地とすべきである」。文中では、川島浪速の政治理想についても触れられている。「巧妙にうまく満蒙の人々を導いて、独立の希望を抱かせ、一つの国家を形成して、互いに信頼して胸襟を開く状態に至れば、私の理想を推し進めることも決して難事ではあるまい」。また、川島浪速の視察したところによれば、「中華民国の分裂瓦解には、おそらく数ヶ月を要すまい。日本がいかなる措置を講じようとも、これを日本発展のための確固たる地盤とすることが、人知れぬ苦勞をしながらも私が従事してやめない理由である」。

川島浪速は、自身の政治理想を実現するためには、まず満蒙独立国を建設しなければならないと考えており、そのためには以下の条件が整っていることを建言した。「一、帝国と満蒙団体の主要人物間においては、事前に意思の疎通をはかっておき、水面下での共謀をより強固にするため、我々が保護するという点においては、彼らに完全に信頼させなければならない。二、満蒙団体の外交はすべて帝国の指示により、適当な中国人の名義でもって文武の重要な政治的決定に参加して、実際の中枢を掌握しなければならない。三、以上の目的を完全に達成するために、満蒙団体の首脳には最も私を信頼している人物を当て、これを自由に操縦して適当な前途を選択させることができなければならない」⁶³⁾。川島浪速はさらに日本の取るべき

62) [日] 曾村保信「辛亥革命与日本」(日本国際政治学会編『日本外交史研究・日中関係的展開』、有斐閣、1961年、第50-51頁) 参照。

63) 「対支管見」(日本外務省外交史料館、JACAR.Ref B03030267800) より。

対華外交方針について、日本は是が非でも「南満州と東部蒙古」を押さえるべきで、最終的には日本帝国の重要な地盤、かつ勢力範囲にするべきであると提案している⁶⁴⁾。川島浪速の『対華管見』を眺めてみると、「満蒙独立」計画を通して、日本政府のために対外拡張を建議するだけでなく、しかも自身の政治理想を実現させることが可能となる。これより、川島浪速は一人の極端な民族主義者であると言えよう。

1913年1月17日、善耆の第三子憲章が北京歩軍統領衙門によって捕縛され、公印なども押収の上、裁判所へ引き渡されて尋問を受けた⁶⁵⁾。5月16日、総統府は宗社党の名簿を入手し、「一万元の賞金を懸けて肅親王善耆を指名手配」⁶⁶⁾とする。8月4日、もと清の統領であった李洪亮は善耆の付託を受け、「北京において軍資金を調達し、錦州の地の馬賊を買収して氣勢を上げた」⁶⁷⁾。

1914年、第一次世界大戦が勃発すると、西方の列強各国は欧州での大戦に追われて、東方を顧みる余裕はなくなった。日本はこの機に乗じて対華拡張政策を強く推し進める。1915年1月18日、日本は中国に不平等な「二十一箇条」の要求を突きつけ、中国での権益を独占しようと考えた⁶⁸⁾。1915年夏、袁世凱の帝制運動は高潮に達するが、その一方、南方の各省では反袁運動があらしのような勢いで盛り上がり、日本政府と軍部は袁世凱を打倒する方針をとることで一致した。善耆は袁世凱の罪悪行為を寺内正毅に切に訴え、援助を請うている。「わたくしめは旅順に来て以来、ひとかたならぬご支援を賜り、感謝の気持ちを生涯忘れることはありません。ひそかに袁氏の情勢を案ずるに、帝制が成立すれば中国は必ずや乱れるでしょう。そして、帝制にならずとも、中国はやはり乱れると思われます。それはな

64) 「平和的対支外交ニ対スル私見」(日本外務省外交史料館、JACAR.Ref B03030268200) 参照。

65) 「北京電報」(『民立報』、1913年1月19日) 参照。

66) 「北京電報」(『民立報』、1913年5月18日) より。

67) [日] 山崎誠軒『支那の宗社党』(上) 四卷十二号、第18頁参照。

68) 王雲生編著『六十年来中国与日本』第六卷(三聯書店、2005年) 第69-78頁参照。

ぜか。上は我が主君を軽んじ、下は我が民を愛せず、虚偽は百出して重税を課す。古来、このような立国の道はありません。閣下は忠義を胸に秘め、天下の尊敬を集めておられます。もし時期至りて積極的に動かれたならば、ひとり弊国の百姓を救うのみならず、貴国の不朽の功業を打ち立てることになるでしょう。わたくしめも非才を顧みず、謹んで閣下の後に従いとうございます」⁶⁹⁾。同年8月、大隈重信が日本の首相兼外相に任命された。対華政策において、彼は多面的な袁世凱打倒の方針を採択し、中国を混乱の中に陥れて、機に乗じて中国の領土を分割しようと考えたのである。

1916年3月、善耆と川島浪速は、東北の「土地、山林、牧場、鉱山、住宅、水利などを借款の担保として」、日本の大財閥大倉喜八郎と契約を交わして百万円を借り受けたが、それは川島浪速の監督のもと使用されることになった⁷⁰⁾。大倉への謝礼のために、善耆は備忘録に署名をし、事が成った暁には、松花江と支流の流域にある森林伐採の権利、および木材を河から流す際に税金を徴収する権利などを大倉に与えた⁷¹⁾。借款の件に関しては、後藤新平が「日支衝突之真相」の中で、「我が帝国政府が肅王を推戴して満洲の帝位を正し、宗社党を利用して満洲で挙兵し、もって袁世凱を打倒する」⁷²⁾ ためであると解釈をつけている。経費が保証されると、4月中旬、善耆は千五百人以上を集結して、正式に「勤王軍」の旗を揚げた。武器や装備はすべて日本から提供されたもので、教官も日本人の将校が当たった⁷³⁾。

同年6月6日、袁世凱は愁いと憤りのうちに世を去った。中国の南北が対立し、社会の動揺と不安が一段と激しくなると、日本の対華政策は急激

69) 「善耆致寺内正毅書一」(湯志鈞『乗桴新獲：從戊戌到辛亥』、江蘇古籍出版社、1990年、第396頁)より。

70) 憲鈞「善耆反対宣統退位図謀復辟」(中国人民政治協商會議北京市委員会文史資料委員会編『文史資料選編』第十二輯、北京出版社、1982年、第63頁)参照。

71) 「備忘録」(中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』第35号、中華書局、1964年、第163頁)参照。

72) 王雲生編著『六十年来中国与日本』第七卷(三聯書店、2005年)第47頁より。

73) 章伯鋒訳「西原亀三關於日本利用宗社党及巴布扎布的報告書」(中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』第35号、中華書局、1964年)を参照。

に変化する。すなわち、「黎元洪の大總統就任を支援し、黎元洪を推して中国南北の形勢を調整することを図り、いわゆる反袁工作はすべて中止とすることを決定」した⁷⁴⁾。さらには川島浪速らが満蒙挙兵計画を実施することを禁止し、「關於滿蒙挙事団解散報告」⁷⁵⁾を策定する。善耆の子である憲奎は、宗社党人および日本の大陸浪人を引き連れて、当初の計画通りパプチャブの軍営に身を投じ、結集して挙兵を計画した。7月1日、パプチャブはみずから三千の蒙古騎馬隊を率いて、龍旗を掲げ、「興滿滅漢大都督巴」と大書し、南下東進した。8月14日、パプチャブは南滿鉄路線上にある郭家店に到着すると、すぐに夜襲を仕掛けて旧市街地を占領し、善耆も宗社党人を呼応させるために自ら告示を起稿して、「数千枚を印刷し、満蒙の各地にひそかにまき散らした」⁷⁶⁾。

8月30日、川島浪速は松本菊熊らを郭家店に遣わしてパプチャブを訪ねさせ、「肅親王善耆の感謝の手紙」を手渡すと同時に、「肅親王と川島浪速の両人の名義でもって、パプチャブ以下各兵士らに賞与を与え」、パプチャブに内蒙古もとの地に部隊を率いて戻るよう勧めた⁷⁷⁾。しかし、内蒙古へ帰る道中では略奪をほしいままにし、最終的には林西県での戦闘で奉軍に銃で攻撃され、率いてきた全部隊が壊滅する。ここに至って、善耆と川島浪速が策動した「第二次満蒙独立運動」は、道半ばにして潰えたのである。

二人の策動した二度にわたる「満蒙独立運動」を通観すると、結局のところは中途にして終わりを告げている。善耆は「清朝回復」を自分の行うべき任務と考えていた。それゆえ、「もしも志を全うする者が一人もいなくなれば、後世の天下と我が建国の祖宗にどうして顔向けができようか。や

74) [日] 栗原健『対満蒙政策史の一面：日露戦後より大正期にいたる』（原書房、1966年）第152頁より。

75) 「關於滿蒙挙事団解散報告」（中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』第35号、中華書局、1964年）第165頁参照。

76) 胡平生『復辟運動史料』（正中書局、1992年）第34頁より。

77) 「駐長春領事山田四郎致石井外務大臣報告」（中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『近代史資料』第35号、中華書局、1964年、第160頁）参照。

むを得ない時は、わたしはただ伯夷と叔斉を見習うのみである」⁷⁸⁾とかつて言っており、ここにその信念と決心がいかほど固いものであったかが見て取れよう。日本の大陸浪人川島浪速は、長期にわたって中国の時局を視察し、日本のために「大陸政策」を建策した。彼はその『対華管見』において、「ロシアの勢力に対する均衡を保持することは、我が国が生き残るために必要なことである。将来、中国とアジアのその他の地にいかなる強国が勃興しても、かりに帝国が満蒙の地における確固たる立脚点を欠いては、アジアの永久的な覇権を掌握し、牛耳を執って他国とともにこれを攫取し、諸国を操ることは不可能である」と何度も強調している⁷⁹⁾。1926年にも、「満蒙地区を我ら大和民族のもとに併合すれば、国民が生存の危機を脱却することは必定で、最終的に中国の問題を解決するためには、大陸の最も優れて最も便利な土地を占領しなければならない」と、川島浪速は指摘しているのである⁸⁰⁾。

要するに、善耆を代表とする宗社党人は、その希望を日本という外的支援に寄せて清朝復興を図り、川島浪速を代表とする大陸浪人は、東三省と内蒙古を中国から引き離し、日本のコントロール下にある「満蒙王国」をでっち上げようと企図していたのである。そうして、「満蒙独立運動」は「九一八事変」の前奏となった⁸¹⁾。

三、小結：故郷は何処に在りや

これら一連の復辟活動を経ても⁸²⁾、善耆ははまだ「大清復興」を果たすこ

78) [日] 川島浪速『肅親王』（出版地不明、1914年）第52頁より。

79) 「対支管見」（日本外務省外交史料館、JACAR.Ref B03030267800）参照。

80) 「対支竝に対満蒙の根本的経綸」（防衛省防衛研究所、JACAR.Ref C04015970600）参照。

81) 日本外務省編纂『日本外交年表及主要文書』上（原書房、1978年）第421頁参照。

82) 1917年6月14日、張勳は部下を引き連れて北京に入り、復辟活動を進めた。善耆はその知らせを聞くと、20日に代表四名を大連から北京へ派遣している。張勳『復

とができず、結局は宗社党もこれに伴って解散した。1922年3月29日、善者は旅順にて病死し、その子の半数は満州国で職に就いた。臨終の前も始終心に故君を思い、復辟を遂行できなかったことを一生で最大の遺憾とした。そこで、とくに溥儀に最後の上奏文を進めて、ついに「祖先の功業回復」を果たせなかった恨みつらみを訴えた。以下はその全文である。

恨みと哀鳴を抱きつつ、天恩に叩謝し、仰ぎて台鑑を祈り上奏す。臣ひそかに思うに、幸いにも宗室に生を受け、長らくその御恩に浴す。はじめ爵位を授かりしとき、義和団の禍に遭い、家も尽く破壊されり。しかるに、先朝はこれを哀れみたまひ、臣に崇文門稅務監督の職を賜る。臣、積弊を除くや、稅収にわか増せり。畏れ多くもこれを認めらるるに至り、歩軍統領を任せられ、御前大臣に充てられ、民政部尚書に就き、理藩部尚書の職を賜る。辛亥の事変起ころや、各処に飛び火し、ついには不適なる者が登用され、ひそかに国運傾く。悩みて心を痛めしこと、これに勝るは無し。臣、つとめてこれに従わざるも、挽回するに術無く、懈怠たる朝廷とともに三光を戴くこと能わず。故にこれを旅順に避け、生を偷む。ひそかに艱貞の志を抱きつつも、開済の才無きを恨む。常に再び興さんと機を窺うも、終に一たび成功の寄る無し。宮の屋根を見上げれば、瞬く間に十年。憔悴していま死につく、臣の罪はまさに誅すべし。伏して願いますに、陛下におかれましては、しばし隠居の上、徳を養い時節の到来を待たるべし。長寿を天に祈り、再び至治の世の訪れんことを。朝の再興して安泰なれば、微臣の身は泉下にあれども、袂に喜びを含むを蒙る。臣には子十数人あるも、おおむね駄馬のごとき不才にて、重荷には耐え難し。いわんや臣も久しくご無沙汰致しており、その罪過はまことに深きもの

『復辟紀実』（出版地不明、1917年）第4-5頁、翹生『復辟紀実』（出版地不明、1917年）第43頁を参照。

ゆえ、爵位と領地の返還をお受け下さいますよう。即日、世襲を断ち、少しく臣の罪を贖うべし、もって臣の志を尽くさん⁸³⁾。

善耆が病を得て世を去ると、川島浪速はこのため関東州庁に、「庚子事件の際、日本公使館は北京東交民巷にある肅王府の守衛を借り出している。そのため肅王府は戦火のうちに焼け崩れる結果となった」ことを補償の理由として、土地を無償で肅王家に譲渡して使用させるよう申請した⁸⁴⁾。ただ、善耆の子孫の述べるところによれば、「川島浪速と川島量平は、大連市議会副議長の若月太郎らと結託し、肅親王家の財産をだまし取り、日本に持ち帰って鉱山などの土地を購入しようと共謀していた」⁸⁵⁾ともいう。

川島浪速の性格は、多くの日本人民族主義者と同じく、「左翼と右翼の思想を一身に集め、マキャベリの特徴を有しつつ、理想主義的な色彩をも備えている」⁸⁶⁾。彼は一貫して、「中国人を蔑視する優越感と日本の利益を拡大しようとする考えを結合させ」ることで、中国に対するその侵略論を形成していったのである⁸⁷⁾。その原因を突き詰めれば、主には川島浪速の「アジア」、「東方」に対する文化を越えたアイデンティティの意識、つまりは「大陸コンプレックス」によって引き起こされたものであろう。清朝末期、中国の警務制度は日本の巨大な影響を受けており、「中国人学生を日本に派遣して警務訓練を受けさせ、日本人教官を雇い入れ、日本の警察の規則と法律を採用」⁸⁸⁾している。川島浪速は「清朝の警察組織と制度の確立に対し

83) 夷良『野棠軒文集』（林慶彰主編『民国文集叢刊』第一編第六集所収、文聴閣図書有限公司、2008年）第69-70頁より。

84) 「肅親王遺族補助ニ関スル件」（日本外務省外交史料館、JACAR.Ref B03050747000）参照。

85) 愛新覚羅・連紳『清和碩肅忠親王善耆』（未刊行）第135頁より。

86) [日] 迪肯 (R.Deacon) 『日本情報機構秘史』（群益訳本、群衆出版社、1985年）第97頁より。

87) 胡平生『復辟運動史料』（正中書局、1992年）第48頁参照。

88) 王家儉『清末民初我国警察制度現代化的歷程（1901-1916年）』（台湾商務印書館、1984年）第353頁より。

て多大な貢献」をしており、それは近代の警察制度にまで計り知れないほどの影響を与えている⁸⁹⁾。それゆえ、京師警務学堂は「表面上は清朝の警務学堂であるが、実際には、清朝における日本の勢力を増大させるための機構であり、危険分子を多く含む団体である」⁹⁰⁾と指摘する向きもある。川島浪速を代表とする大陸浪人たちにも、日本の対外拡張と本国の利益保護のためという、歴史的に見て客観的な要素が存在することは、疑う必要がない。しかし、彼らの標榜した「汎アジア論」や「種族論」が中国の人民を傷つけたことも、また事実なのである。つまり、彼らがこの道に沿って進み続けてゆく限り、日本の軍国主義および世界の植民主義を超越することにはならないのである。

政治的な必要から、善耆は川島浪速の「支援」を請い、満蒙人士に呼びかけて清朝の復辟活動に尽力した。時代の潮流とは相容れなかったため、最終的には「大清復興」を実現するには至らなかったが、しかし、それは一般的な意味においての功名や官禄といった個人の利益に端を発するものではなく、まさに強烈な自己同一性、あるいは国家との同一性（ここでは民国のことではなく、大清王朝を指す）によって突き動かされたものであったのである。善耆はかつて言及している。「将来の世界は黄色人種と白色人種の壮大な競技場となるであろう。アジアの大半がすでに白色人種の勢力によって圧迫されている今、この滔々と押し寄せる荒波を乗り越えて挽回するためには、中日両国の合作が必須であり、さもなくば、それを実現することはできまい」⁹¹⁾。善耆にしてみれば、日本こそは、彼が政治的理想を寄せ、しかもそれを実践した異国の地であり、旅順は彼が亡命のために身を寄せた場所に過ぎなかった。辛亥革命後、善耆に「最大の支持と援助」を送った国は、唯一日本のみなのである。

89) [日] 黒龍会主編『東亜先覚志士記伝』（原書房、1966年）第287頁参照。

90) [日] 桶谷秀昭『二葉亭四迷と明治日本』（東京文芸春秋社、1986年）第220頁より。

91) [日] 川島浪速『肅親王』（出版地不明、1914年）第72頁、[日] 石川半山『肅親王』第169頁より。

一方、日本政府からすれば、民国は創建されたばかりで政局はなお定まっておらず、この機に乗じて満漢の矛盾と復辟勢力を利用することで中国を分裂させ、同時に「東漸南侵」を図るロシアに対抗して、最終的にはアジアにおける主導権を確立したいと考えていた⁹²⁾。つまり、善耆の復辟活動「支持」は、日本の満蒙政策における根幹であり、中国大陸政策の具体的な実践の一つだったのである。日本の大陸政策こそは、「近代日本の対華関係における核心的な国策であり、それはすなわち、近代日本のすべての対外関係に影響を及ぼす」⁹³⁾ことを決定づけるものであった。しかし、日本の政府内には意見の不一致もあり、加えて歴史の潮流には抗いがたく、善耆を代表とする宗社党人と川島浪速がいかにかに腐心したところで、彼らの画策した「満蒙独立」はついに失敗に終わったのである。

善耆は旧王朝のために他国を頼り、川島浪速は日本のために異郷の中国に足を踏み入れた。二人の理想はいかんともしがたい現実の中に飲み込まれ、その人生を混乱の時代の中で絡ませながら過ごしていった。そして、善耆と日本の間を川島浪速が手引きすることで、合従連衡を図ったのである。川島浪速は、「善耆は揺らぐことのない真の親日家である。ゆえに犬養毅は彼が中日共存を鼓吹する同士であると見なした」⁹⁴⁾と考えている。石川半山もまた、善耆は「徹頭徹尾、親日主義の人である」⁹⁵⁾と判断している。善耆と川島浪速それぞれの身の上に体现された複雑性は、彼らの生きた時代の政治と歴史の変遷の特性を反映している。また、彼らの政治活動は、近代における中日両国の関係の変化が複雑に錯綜していることをも物語っているであろう。いかなる国家も、いかなる民族も、すべては「人を以て本と為」さねばならず、国家間、民族間における強権と偏見を排除する、このことこそ重視されてしかるべきであろう。

92) 解学詩『偽満洲国史新編』（人民出版社、1995年）第12頁参照。

93) 宋志勇・田慶立『日本近現代対華関係史』（世界知識出版社、2010年）第2頁より。

94) 章開沅『辛亥革命与近代社会』（華中師範大学出版社、2011年）第265頁より。

95) [日] 石川半山『肅親王』第164頁より。